

親嶋会 7 月 「昭和 22 年の育児」

東京の世田谷区で食育のボランティアをしています。小学生達にそばの種蒔から刈り取り、脱穀、最後にそば打ちを教えているのですが、子供たちが放つエネルギーには「希望」と将来を照らす「輝き」を感じます。一方、幼児に対する虐待や育児放棄などのニュースも多く、心が痛みます。出産・育児の大変さはいつの世も変わりませんが、支援する仕組みで世界に冠たるものが母子健康手帳(昭和 17 年制定時は妊産婦手帳)と言われてきました。その日本でも、足りないものがあるようです。

私が還暦を迎えたとき、今は亡き母から私の出生時の妊産婦手帳を手渡されました。手帳とは名ばかりの、今にも破けそうなわら半紙 14 ページに綴られているもので、冒頭には「妊娠中ノ養生ニ心ガケテ立派ナ子ヲ産ミ、オ国ニツクシマショウ」という文章とともに、東京都だけでなく、町会長の印が押されていることから、近所づきあい以上の結束が強かった時代です。

診療記録や、出生体重八五〇匁(匁表記です)といった出産記録のページに続いて、特別物資配給として出産一か月前にバターと衣料品、出産一か月後に衣料と燃料の支給が書かれています。最後の「出産祝賀菓子購入券」には消込の印が押されているところを見ると、若き日の母はしっかりと貴重なお菓子を手に入っていたようです。

すべての物資が圧倒的に欠乏していた時代の育児は大変だったと思います。バター・菓子・衣料品などは闇市では法外な金額で売買されており、庶民の手には入らなかったでしょう。昭和 22 年というベビー・ブームの真ただ中、敗戦国の我が国がなけなしの物資を無償配給していたことは「国家の気概」ともいえます。

振り返って、現代に命を授かってきた子供たちやその両親に対して私たちはどのような支援が出来ているのだろうかと思ひめぐらします。母子健康手帳で担保されている医療的な面、補助金など経済的な面だけでなく、今の時代の育児に「何が欠けているのか」、そのための「必要な支援」は何かを考えてみる意味はありそうです。

会長
内池 正名